



シェイクスピア

福原麟太郎著作集  
1

福原麟太郎著作集 1

シェイクスピア

昭和四十三年九月二十日 印刷  
昭和四十三年九月二十五日 发行

定価

著作者 福原麟太郎

発行者 小酒井益藏

印刷者 小酒井益三郎

印刷所 研究社印刷株式会社

発行所 研究社出版株式会社

郵便番号一六二

東京都新宿区神楽坂一の二

電話東京(三六)四五二一(代表)

振替東京 八三七六一

(乱丁・落丁本はお取替え致します)

# シェイクスピア

福原麟太郎著作集

1

研 究 社

1968

# 目次

## シェイクスピアへの接近

|                      |   |
|----------------------|---|
| 劇作家シェイクスピア .....     | 三 |
| われわれのシェイクスピア .....   | 二 |
| 近松とシェイクスピア .....     | 三 |
| 『ヘンリー五世』について .....   | 六 |
| 『お気に召すまま』 .....      | 五 |
| 『デュリアス・シーザー』 .....   | 六 |
| 『シーザー』その他 .....      | 五 |
| 『デュリアス・シーザー』新訳 ..... | 五 |
| 『ロミオとデュリエット』 .....   | 七 |

# 目次

|                        |     |
|------------------------|-----|
| 吉田健一著『シェイクスピア』……………    | 六   |
| 坪内逍遙訳『シェイクスピア全集』……………  | 八〇  |
| 福田恆存氏の新沙翁……………         | 八二  |
| 「ハムレットの思い出」など……………     | 八四  |
| ハムレットの思い出……………         | 八四  |
| 劇壇近事……………              | 九一  |
| 世代の恋人……………             | 九三  |
| 『リア王』の上演を記念して……………     | 九四  |
| 『ウィンザー』のフォールスタッフ……………  | 九七  |
| 沙翁劇の映画化……………           | 一〇一 |
| 沙翁劇の映画化……………           | 一〇三 |
| シェイクスピアと映画……………        | 一〇五 |
| 映画『ヘンリー五世』……………        | 一二三 |
| 映画『ハムレット』……………         | 一二四 |
| 映画『ロミオとジュリエット』を見て…………… | 一二三 |

|           |    |
|-----------|----|
| 私とシェイクスピア | 二四 |
| マクベス      | 一三 |

## シェイクスピア的ということ

|                      |     |
|----------------------|-----|
| シェイクスピア的ということ        | 一四三 |
| フォールスタッフ             | 一五〇 |
| 『冬の夜ばなし』             | 一六四 |
| 織屋のボットム              | 一七五 |
| 『お気に召すまま』            | 一八三 |
| 『ハムレット』              | 一九二 |
| 『コリオレーナス』            | 二〇二 |
| 偶然——シェイクスピア的ということの一つ | 二〇九 |
| 『オセロ』を見ながら           | 二二七 |
| 『アントニーとクレオパトラ』       | 二三六 |

|        |     |
|--------|-----|
| 『マクベス』 | 二二六 |
|--------|-----|

## シェイクスピア講演

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| シェイクスピアの文学——『夏の夜の夢』—— | 二四七 |
| 『ロミオとジュリエット』          | 二八三 |
| 『ヴェニスの商人』             | 三三四 |
| 『ハムレット』               | 三六三 |
| 『マクベス』                | 四〇二 |
| 『あらし』                 | 四四〇 |
| シェイクスピアの言葉から          | 四六八 |
| 教室のシェイクスピア            | 四八六 |

|      |     |
|------|-----|
| あとがき | 四九五 |
|------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 掲載紙誌一覧表 | 五〇九 |
|---------|-----|

シ  
ェ  
イ  
ク  
ス  
ピ  
ア  
へ  
の  
接  
近



## 劇作家シェイクスピア

### 一

この頃、芝居に関係のあるかたがたと話す機会があつて、いろいろ有益な話を聞くので、それから始めることにする。

六、七月帝劇で公演している『夏の夜の夢』に演出助手をしている岡倉士朗氏が、シェイクスピアというのは非常に大衆的な作家なのですね、といったり、シェイクスピアは「想像をもつて補うべき」作家ですね、といったりしていられた。いちいち面白いと思つた。「想像をもつて補う」というのは『夏の夜の夢』の中のセリフなのだが、実際、シェイクスピアの脚本を前にして見ると、想像をもつて補いさえすれば、どんな演出でも出来そうな気がする。それでいて、脚本それ自身はちっとも損われないのではないかと思う。また岡倉さんは、シェイクスピアという人は、いたづらをする人で、とも言つていられた。

それはやはり『夏の夜の夢』のなかで、あれは筋をご存知の方にはすぐ解るのだが、妖精のパックが、恋をする二人の男の目に恋草の汁をたらす、そうすると、目を開けた瞬間に見た目の前の人を恋するようになっていく。ところがパックの誤ちで、ディミートリアスという青年は嫌いな人を恋するようになり、ライサンダーは何とも思っていなかった人を熱烈に慕うようになる。そこで二組の恋人の愛恋関係が入り乱れてとんでもないことになるのだが、そのうちライサンダーの方は、元へ戻す目薬を注がれて、めでたく愛人のハーミアのもとへ帰ってくる。ところが、ディミートリアスの方は、そのままにされて、嫌いだっただけはずのヘレナと仲よく腕を組んだまま芝居が終る。恋草の汁の効能は夢幻の世界の話なのだから、現実に戻れば、ヘレナはまた嫌われなくてはならないのに、夢幻のまま現実へつづいてゆく、という仕掛けになっている。

つまりシェイクスピアのいたづらで見物はおやおやと思っているうちに、嘘が本当になってめでたしめでたし、と終ってしまうのである。ディミートリアスにも元へ戻す目薬をやるべきところを、パックが忘れたのではない。たしかに作者の作画的な戯れなのである。とても凡庸にはできないあそびで、ちょっと頭を下げる。

その話をしておくとは解るのは、その帝劇の『夏の夜の夢』を『星条旗』紙の演劇記者が評した際（昭和二十一年六月十二日）、この芝居を「人間の愚かさ、物事の空しさについての喜劇」——「空し

さ」ではうまく言い表わせない。原文では「非<sup>アンリ</sup>實在<sup>アリテ</sup>性」——と言っていることばである。その批評はなかなか正直に書いてあるもので、この言葉なども面白い。その非實在性の表現はすなわち、このいたづらにも見られる。思えば随分皮肉なものである。恋愛とか結婚とかいうのは、そんなものかも知れない。『夏の夜の夢』は、婚礼の祝賀の席上での余興に書かれたものらしいが、さりとてはこのディミートリアスの件りは人を喰った話で、そんないたづらをそつとやってほくそ笑んでいゝたという次第であろうか。そのような心の秘密は、もつと本質的な点でも、いくらか発見される。細かに脚本を読むと、後から後から見つかつて驚かされるものである。

なにしろどの脚本もどの脚本も、実に豊富な内容を持っている。汲めどもつきない。そして千差万別の人物が現われて来、種々様々の生活が写されている。研究してゆけばゆくほど深く味わえる。それは実に不思議な文学である。

この春、われわれは久しぶりにシェイクスピア祭をして、神田三崎町の三崎会館で、記念講演会を催した。その時、新劇俳優の千田是也氏が「シェイクスピアと俳優術」という話をされた。千田氏は壇へ上ると、シェイクスピアの作品は誠に内容の豊富なもので、実にうまいごちそうであります、と言った。そして、だんだん話してゆくうちに、『ハムレット』のことになって、千田氏自ら先年ハムレット王子を演じた時の経験を語り、あの芝居では役者の身体にも無理をさせないように

できているのは驚嘆いたします、第五幕では、あばれなくてはならないのですが、その前にちゃんと休息できるように仕組んであります、と言った。これには私も驚いた。そういう心づかいまでしてあるとは知らなかった。

シェイクスピアの脚本は読むだけでも面白いが、元来は、「読む脚本」ではない。上演のための台本なのである。だから役者に都合よく書いてあることは当然であるが、そこまで考えてあるとは知らなかった。千田氏は、これからたくさんシェイクスピアをやって見たいと思います、と語った。私もこれから何度でもシェイクスピアを読んでみようと思った。英文学でいちばん面白いのは、何といってもシェイクスピアである。

## 二

ところが、シェイクスピアの作品というものは相当むづかしい。シェイクスピアは偉いが、ただ一つ悪いのはその文章の難解ということであると書いた英国の学者がいたのを私はおぼえている。だから、むづかしいのは私にとってばかりではないらしい。

とにかくシェイクスピアというのはかなり言葉数の多い作家である。そして詩人である。ただの散文的な劇作家ではない。何かしら詩的な精神が漂っている。だから表現も時にはなほだ詩的な装

飾を施してある。それでよけいむづかしくなる。私はここに、坪内逍遙訳『ロミオとジュリエット』を持っている。この訳は、原文の文章も装飾的なところが多いので、すこし行き過ぎと思われるほどまで雅文体で訳してあるのだが、見本として、一節を出してみよう。

モンタギュー妻 おお、ロミオは何処に？（ベンヴォーリオに）今日そなたは逢はしましたか？ 此騒動に關  
係うてゐなんだは、ま、何よりも喜ばしい。

ベンヴォーリオ さテ、今朝、東の金の窓から朝日影のまだ覗きませぬ頃、胸の悶を慰めませうと、郊外に出  
ましたところ、市からは西に当る、とある楓の杜蔭に、見れば、其様な早朝に、御子息が歩いてござる、  
近づけば、それと見て取り、忽ちのうちに杜の繁みへ。人目を避くるは相身互ひ、浮世を煩う思ふ折りに  
は、身一つでさへも多いくらゐ、強ち同志を追はずとも、只もう己が心の後をのみ追うて、人目を避くる其  
人をば此方から避けました。

モン妻 げに、幾朝もく、未乾ぬ露に涙を置添へ、雲には吐息の雲を加へて、彷徨いてゐるのを見掛けた  
とか。されども遠い東方の、曙姫の寢所から、あの活々した太陽が小昏い帳を開けかくれば、重い心の倅  
めは其明るさから逃戻り、窓を閉ぢ、日を嫌ふて、我れから夜をば製りをる。良い分別をして此病の根を  
絶たねば、一定、忌はしい不詳の基。

この部分は『ロミオとジュリエット』の中でもむしろ拙い所で、あまり感心しないのだが、そう

いう所が見本には良い。このように比喻や形容をたくさんつかって、言葉を繁く重ねてゆく。むづかしい上に随分おしゃべりの文章である。はなはだこみ入っている。だから英語のよく出来ない人には読みにくい。その上、言葉の味というものがシェイクスピアでは殊に大切だから、ただ英語が読めるだけでは、まだ足りない。英学生にとっては厄介な代物である。

しかし相当の学力があつて、脚本を読んでゆくと、すばらしく面白い。どんなに言葉が飾つてあつて、故事出典でからめてあろうとも、そんな事は氣にならない、解り出すと息をもつかず読ませるものである。言葉がその香、匂、色艶をもつて、そのまま飛び込んでくる。もう装飾や形容ではない。その場面のあらゆる背景連想感情を束にしてそれが言葉の形で読者の心に躍りこむ、そうなれば、もう修辭ではない。生きた感情であり経験である。それと同じことが英国で芝居を見ているときにも起る。

われわれ外国人には第一幕のところだと、そのテキストを誦んじていない限り、十分には言葉が解らない。ところが二幕三幕と進んでくると、舞台の上の動作を見ていながらセリフを聴くせいもあるが、だんだんよく解つてきて、二幕目のところからは、一々の言葉がひしひしと味わいをもって心に響くようになる。実に不思議である。そしてそれが詩によつての表現（シェイクスピアはほとんど全部を詩の形で書いた）であるなどということは感じられず、ただ美しい英語の跳梁である。

しかも、まるで日常の会話のように自然に聴かれる。そして、ふだん自分の書斎では辞書や註釈本を傍において、首つぴきで読んでいるテキストが、何の苦もなくすらと解る気がするのである。それは確かに「解る気がする」ので、実際一々の言句をとり出して訊ねられれば解らないに極まっている。しかし解るのは確かに解るのである。脚本の力で、全体の迫力で部分までが何となく解らせるのである。

けれども書斎の読者には確かにそのような言葉の繁雑なためのむづかしさがあって、非常に読み難い、それでいて面白いという不思議なもののだが、シェイクスピアには、また時に非常に簡単な、ほとんど今日のわれわれの言葉と全く違わないと思うような、素朴なセリフが、ひょいと投げこんであって、それに出会すと、ばったり降参してしまうことがある。胸にひしひしと応える。そういう特色もある。

たとえば『マクベス』という芝居で、マクベスは王様を殺して自分が王様になる。すると重臣で自分に快く思っていないのがいる。そこで、謀反を言いたてて殺してしまおうとする。マクダフという將軍は、そのようなわけで、マクベスにねらわれて、妻や子を殺されてしまう。その報告をうけたマクダフは悲痛な思いに胸をしぼる。そして、ただ一言、